

道化と狂気 (その二)

— Tempest (あふん) —

中 村 浩 路

「だいたいファルスというものは、理が身についた人間が、理をのがれようとしてもがき発するバクハツです。意味を知りすぎた人間が意味から無意味へ駆け込んで行く遁走ですよ。悲しいのです。……」

一、序にかえて

私は、先に紀要第十四号(一九七〇)の中で、上記の「道化と狂気」という標題のもとに、「真夏の夜の夢」を、特に「見る」という人間の行為を通して、考察しておいた。

今回は、残酷さと笑い、ナンセンスと非条理 (absurdity) の面から、「テンペスト」の問題点を取りあげて、それと「夢と現実」のメカニズムとのかかり合いを中心に論じてみた。

この演劇は、ヤン・コットも彼の「シェイクスピアはわれらの同時代人」(白水社)の中で述べているように、『まずここに扱われている真の「あらし」は恐ろしくて厳しく、叙情的でグロテスクなものだ。現実の世界を相手にした激しい総決算なのである。』

しかしそれは世にいうところのルネッサンスの人文主義者(ユマニスト)の目から見た、栄光に包まれた世界の姿ではない。すべてをニンゲンの目で見、ニンゲンの心で感じ、ニンゲンの頭で考え、すべてをニンゲンの倫理と秩序にしたがわせる人間中心主義、人間の論理万

能の考え方の裏に存在する、失われたイリュージョンや苦い知恵や、執拗ではあるがもろい希望などの劇を、我々はこの「あらし」の中に見出すことでしよう。

東野芳明氏は、彼の「グロッタの画家」(美術出版社)の中で、シェイクスピアの「あらし」をとく一つのかぎと思われるような、次の言葉をしるしている。

「……人間中心主義(ユマニスム)にとって、これらメドウサやキクロプスらのアンチ・ユマニストたちは、嚴重に封をして洞穴へとじこめておくべき代物だったにちがいない。経験論者フランシス・ベーコンにも「洞穴の偶像」があり、「自然そのものには存在しないにも拘らず、人間が自分で勝手に作りあげた、単なる空想の所産である。」と云って、もっぱら人間主義的なクソリアリズムを謳歌している。しかし、人間のこういう思惑を裏切って、これらの洞穴の住人どもは、単なるひよわな偶像でなくて、れっきとした化物という生き物であり、その視線にあえば、なよなよとした肉体は、一瞬に峨々たる岩石と化し、またその煌々と輝く眼差しは天をも吹き飛ばす火山の大爆発を起し、全世界の座標の原点を、人間からたち切つて、一きよに物質のあらあらしい息吹きの中に移してしまう、はなはだ壮烈な化けものなのだ。」

二、狂人と予言者

この「あらし」とよく比較される、というか、この劇をとく「かぎ」に相当すると言われる「真夏の夜の夢」では、劇の名前そのものが「夢」となっている。(しかも、両者共に、結婚の祝いに上演された点も類似している。もつとも、調子はかなり違っているが。)

いずれにしても、夢の中であろうと、現実の場であろうと、真実にものを見た人ならば精神的に、肉体的に、言いかえれば、全人間の

に、かなりの変容を受けずにはすまされない。多かれ少なかれ一種の狂気におそわれる。まして、見た事柄が、奇蹟であれば、その人の語る経験を伝達しようとする言葉は、完全に狂人の言葉となり、他人の目からは、「狂っている者」と見える。

ここで、話を進める便宜上、前の第十四号紀要にのせた一部を、再びここにしておきます。これは、American Heritage Dictionary とその辞書の Appendix に引かれた語源の部より H. C. Wyld の Universal English Dictionary の mania の項から引用したものであります。

前者の語源の men-1 = to think の部分に次のような記述が見えます。順序を追って読んで、考えて頂きたい。なお、必ずしも全文を忠実に再録はしておりませんが、興味をお持ちの方は、直接に同辞書の I-1-529 ページを見てください。

men-1. To think; with derivatives referring to various qualities and states of mind and thought.

I-1-a. in Old English gemynd, memory, mind: (Eng.) mind.

b. Latin mens (stem ment-), mind: (Eng.) mental, ament, dement

c. Latin mentio, remembrance, mention: (Eng.) mention.

2. in Greek -matos, "willing": (Eng.) automation

3-a. Greek mainesthai, to be mad: (Eng.) maenad

b. Avestan mainyu, spirit: (Eng.) Ahriman

II-1-a. Old High German minna, love: (Eng.) minion, minnesinger

b. Middle Dutch minne, love: (Eng.) minkin

2-a. Reduplicated form in Latin memnisse, to remember: (Eng.) memento

b. Latin commisisci (com-, intensive prefix), to contrive by thought: (Eng.) comment

c. Latin remisisci (re-, again, back), to recall, recollect: (Eng.) reminiscent

d. Possibly Latin Minerva, name of the goddess of wisdom: (Eng.) Minerva

3-a. Greek menos, spirit: (Eng.) Eumenides

b. Greek Mentor, man's name (probably meaning "adviser"): (Eng.) Mentor

c. Greek mania, madness: (Eng.) mania, maniac

d. Greek mantis, seer (<"the who is mad"): (Eng.) mancy, mantic, mantis

4. Sanskrit mantra, counsel, prayer, humn: (Eng.) mandarin, mantra

(以下略)

上記の記事を読めば、人間の心の働きの不思議なところ、今からなから感心しながらはおそれなさ。特に、小論に關係の深いのは、I-1-a から II-1-a の部分である。H. C. Wyld は彼の U.E.D. の中で mania の語源について、"originally, to have one's mind in action, aroused, excited" と評をひけてくる。「心がわきたま、かきたまわれ、この状態」を mad な状態だとつづける。この語と mantis = seer (<"the who is mad") とは、紙一重の差があるだけである。真実の姿を直視する者は遂には狂気に至るか、あるいは、真実の姿を伝達する者は狂人と見なされる。このように、人間の「視る働き」と

「精神」の間には、他の感覚以上に密接な不思議な連関が存在するよう
に思われる。

こうした「真実の姿を見たがゆえに狂える者」の語る言葉は、いわ
ゆる常識を備えた人間—コモン・センスの持ち主—にとつては、ナン
センス（無意味）なものである。シェイクスピアの作品においては、
大体において、ナンセンスな存在である狂人や道化に、「ものごとが
よく見える人」の位置が与えられている。しかしリア王でさえも、狂
気の嵐を経験したあとでは、やはり「ものがよく見える」ようになって
いる。彼らすべてが、人間のセンスが、さらにそれにもとづく論理
がいかに頼りにならぬものであるかをよく心得ている。彼らは、「外
現に現れた真実」(reality in appearance)をそのままに受け取り、
さらに証拠を求めはしない。

三、夢と現実

シェイクスピアの道化は、それぞれが哲学者である。ところが、一
六二三年に出版された First Folio の最初の喜劇の部にのせられた
この「あらし」には、そうした意味での道化は登場しない。道化の哲
学とは、それぞれの時代において、疑いようのないことをなってきた
ことに疑いを投げかけるような哲学である。目に見える経験が証明し
ているように思われることに、実は矛盾がこもっているのを、それは
あばき出す。誰が見ても常識と感ずることを滑稽化し、ばかげたこと
の中に、真理を発見する。イヨネスコのことをば借りれば、「喜劇性
とは不条理性の直観のことである。それは悲劇性よりも、絶望的なも
のに思われる。喜劇的なものには解決がない。」

シェイクスピアの他の作品に比較して、特にこの「あらし」は、人
間の見る働きの頼りなさを残酷にあばき出して見せる。しかし、同時
に、この世の中のとあらゆるものが、これは wonder (驚異)

や miracle (奇蹟) に満ちたものか、つくづくと我々に自覚させてく
れる。

まさに、「一瞬一瞬が奇蹟であり、ただちに奇蹟であることをやめ
て一つの事実になる」ことを「あらし」は如実に見せてくれる。プロ
スペロが、最後には魔法の杖を折り、ミラノへ帰って、慕のことを思
いつつ絶望のうちに暮して行く決心を述べることが、それほど暗く受
け取れないのも、その秘密は案外そこらにあるのかも知れぬ。奇蹟
や驚異は、それ自体で魔法の島にのみ存在するのではない。奇蹟はた
だちに事実になる。夢からさめれば現実に返る。その苦きに耐え得る
力をプロスペロは我々に見せてくれる。

Miranda (＝to wonder at) という名前の娘の父親こそ、自分の思
い通りに精霊を動かして、「あらし」を起し、島にたどりついた者達
にさらに精神的嵐(狂気)を経験させ、しかも最後には、年老いて、
魔法の杖を折り、エリエルを自由にして、辛い現実の世界に—墓と絶
望の待つ残酷な日常生活に—戻って行くプロスペロであった。

Prospero

You do look, my son, in a moved sort,

As if you were dismayed. Be cheerful, sir.

Our revels now are ended. These our actors,

As I foretold you, were all spirits, and

Are melted into air, into thin air;

And, like the baseless fabric of this vision,

The cloud-capped towers, the gorgeous palaces,

The solemn temples, the great globe itself,

Yea, all which it inherit, shall dissolve,

And, like this insubstantial pageant faded,

Leave not a rack behind. We are such stuff

As dreams are made on; and our little life
Is rounded with a sleep……(4. 1. 146-158)

プロスペロ

「どうやらお前は興奮しているらしい、驚いたのであらう、さあ、元氣を出せ、息子。余興はもう終った。あの役者どもは、先にも話しておいた通り、いづれも妖精ばかりだ、そしてもう溶けてしまったのだ、大気の中へ、淡い大気の中へ、が、あのたわいの無い幻の織物と何処に違いがあるう、雲を頂く高い塔、綺羅びやかな宮殿、厳めしい伽藍、いや、この巨大な地球さえ、因よりそこに棲まう在りと在らゆるものがやがては溶けては消える、あの実体の無い見せ場が忽ち色褪せて行つたように、後には一片の霞すら残らぬ、吾らは夢と同じ糸で織られて

いるのだ、ささやかな一生は眠りによってその輪を閉じる……」この部分は、プロスペロが妖精の助けを借りて、結婚を祝うマスクを、ファーディナンドとミランダに見せてやつた所である。その劇中劇であるマスクの場面が、不意に中断されて、あわただしく閉じられてしまう。キャリバンの裏切りという現実の事件が、寓意的仮面劇を混乱のうちに終らせる。そして我々の人生が、二つの眠りにはさまれた、はかないお祭り騒ぎにすぎぬことを、若い二人と、我々に語って聞かせる。この島は世界であり、世界は舞台であり、そこにいる人間はすべて俳優である。我々はすべて与えられた役割を与えられた情況の中で、定められた時間内だけ演じて、妖精たちと同じように淡い大気の中へ溶け去っていく。プロスペロが上演したのは、「人生そのもののように短くて束の間の」芝居にすぎない。

しかし、右のセリフはさらに次のように続いていく。老衰を訴え、精神的苦悩を語り、あれを思いこれを思い、ついつい烈しく乱れる心の苦悩をさらけ出す部分へと続いているのである。beating mind と

いう言葉一つとってみても、大きく波打つ、生々とした描写、思考の烈しさを示すと同時に、すぐ右の壮大なセリフとの対照もすばらしい。シェイクスピアは悟り澄ました老人の知恵、一生かかって修得した明察を述べる同一人物が、キャリバンの如き者の反乱等のために、海の波のようにたち騒ぐ心の持ち主であることを示す。

……Sir, I am vext.

Bear with my weakness; my old brain is troubled.

Be not disturbed with my infirmity.

If you be pleased, retire into my cell

And there repose. A turn or two I'll walk,

To still my beating mind.(4. 1. 158-165)

「……実は、今、私には気懸りな事がある。この弱氣を許してくれ、老いた頭を悩ませているのだ、が、私の意気地の無さを氣遣う事はない。良かったら、私の岩屋に入り、休んでいるが良。私はその辺を少し歩いて来よう、それで騒ぐ心も治まろう。」いついかなる時も現実には残酷である。若い二人の婚約を祝う催しが、人生のはかなさと背中合せの関係にあり、さらに老衰へと連続していることに気づかせる。Frank Kermode の言葉を借りれば、「現実を演劇の illusion (幻影) に移しかえるのではなくて、むしろ演劇的幻影の現実性をきわだたせることに、シェイクスピアは力を入れているように思われる。」現実が夢のようににはかないと同時に、夢がいかにかに現実性に富むものであるかも示している。

吉田健一氏は、彼の「シェイクスピア」(新潮社)の中で、この点について、次のように述べている。

「幻影がプロスペロと同じ程度の実体を持っているということは、プロスペロも幻影に過ぎないということであり、そのプロスペロに共感を覚える我々も、彼以上の実体を持っていると自負することにとどれ

だけの意味があるものか解らない。この場合、プロスペロの立場にシェイクスピア自身を置いて見ることは当然許されていい筈である。プロスペロは魔術を通して、自分の魔術が起す幻覚で左右することが出来る地上の世界の脆さを知った。シェイクスピアは舞台で現実を再建することにその生涯を費して、現実というもののからくりの果てに、その空しさを見るようになったのである。それが却って「嵐」にその不思議な明るさを与えていることは事実であるが、同時に又その為にこの作品は、シェイクスピアがそれまでに書いたどの悲劇の大作にもなかった悲痛な響きを持っている。」

そして、たわいがない夢を見る者が、我々人間だけでなく、醜悪な化け物のキャリバンであって、しかも彼のセリフが一つの詩になっている時、そこにこそ我々はシェイクスピアの天才を見出して感嘆しないではおられぬ。

Caliban

……the isle is full of noises,

Sounds, and sweet airs, that give delight and hurt not.

Sometimes a thousand twangling instruments

Will hum about mine ears;and sometimes voices

That, if I then had waked after long sleep,

Will make me sleep again;and then, in dreaming,

The clouds methought would open, and show riches

Ready to drop upon me, that when I waked

I cried to dream again. (3. 2. 136-144)

キャリバン

「……この島はいつも音で一杯だ、音楽や気持の良い歌の調べが聞えて来て、それが俺たちを浮き浮きさせてくれる、何ともありはしない、時には数え切れない程の楽器が一度に揺れ動く

ように鳴り出して、でも、それが耳の傍でかすかに響くだけだ、時には歌声が混じる、それを聴いていると、長いことぐっすり眠った後でも、またぞろ眠くなって来る——そうして、夢を見る、雲が二つに割れて、そこから宝物がどっさり落ちて来るような気になって、そこで目が醒めてしまい、もう一度夢が見たくて泣いた事もあったっけ。」

四、ミランダの告白

そもそもこの演劇の最初の舟が嵐で難破する場では、恐らく水夫達がずぶぬれになり、まことにリアルな演技が行なわれるであろうし、最後には、観客一同、あんなひどい嵐の中では、誰一人助かった者はいないだろう、と思うほどすさまじい地獄絵図がくり広げられる。ところがそれほど烈しい、全世界をゆるがすような大嵐、船上の者一人残らず狂気の発作に襲われた「あらし」が、実はプロスペロの法力によるものだった事を知らされる。我々は劇の最初から、夢と現実、虚構と事実の違いを認識する力を取り払われてしまっている。Keatsの言う Negative Capability を十分に生かして、そのみに頼って、一瞬一瞬の奇蹟を迎えなければならぬ立場に置かれている。しかしそこには、何という「にがさ」がこめられていることか。

第五幕第一場、岩屋の中では、ファードinandとミランダが、王国をかけてチェスをしている。王国などが、いかにはかないものか、馬一頭の値打もないことをシェイクスピアは、すでに「リチャード三世」の中で描いてみせた。(第五幕第四場参照)

そうして何も知らずに、無心にチェスを楽しんでいる二人の前に現れた、王、王の弟、その他従者一同を見て、ミランダは、その名の通り、驚異の気持を口にする。それに対する父プロスペロのわずか数語にこめられた沈痛な響きは、我々の胸を打つ。

Miranda

O, wonder!

How many goodly creatures are there here!

How beauteous mankind is! O brave new world,

That has such people in't!

Prospero

'Tis new to thee.

(5. 1. 181-4)

ミランダ

「ああ、不思議な事が、こんなに大勢、綺麗なお人形のように、これ程美しいとは思わなかった、人間というものが、ああ、素晴らしい、新しい世界が目の前に、こういう人たちが棲んでいるのね、そこには、」

プロスペロ (寂しい笑いを浮かべながら)

「お前にはすべてが新しく」

ミランダが目にしてるのは、彼女と父をこのような境遇におとしいれた悪人たちである。(ゴンザロをのぞけば)。それにもかかわらずこのように叫ばずにはおられなかったのは、すべて、「新しい」からである。しかしこのプロスペロのセリフには、第一幕第二場で、フーディナンドをかばうミランダに対する返答にこめられたほどの残酷さはいかたがわれない。

Prospero

Silence! One word more

Shall make me chide thee, if not hate thee. What,

An advocate for an impostor? Hush!

Thou think'st there is no more such shapes as he,

Having seen but him and Caliban. Foolish wench!

To th'most of men this is a Caliban,

And they to him are angels.

Miranda

My affections

Are then most humble. I have no ambition

To see a goodlier man. (1. 2. 47-6-84)

プロスペロ

「言うな、もう一言でも余計な差出口をしようものなら、一喝を覚悟しろ、憎みこそせぬ、唯では済ませぬ、ええい、騙りの弁護を引受けようというのか? (ミランダの泣くのを見て) うるさい、どうやらこれほど美しい男は無いと思込んでいるらしいが、それもこの男とキャリバンしか知らないからだ……」

愚かな奴め、大方の男に較べれば、こいつはキャリバン、大方の男はこいつに較べれば天使の如きものであろう。」

ミランダ

「それなら私はよほど欲が無いのでしよう、この方以上に美しい人を見たいなどと高望みは致しませぬ。」

なるほど、考えようによれば、今度のミランダの思いあやまりはひどすぎる。けれども、すでに数々の苦難を経て、今や墓と絶望しか残らぬ老人のプロスペロの仕事は終わったのであり、今後は、悪人を見ても感嘆して、人間の美しさをたたえ、そして、そうした人間が数多く生きているこの世界を賛美するミランダの世代が活躍する時代である。暴力や権力闘争、その他のあらゆる悪にまだ染まらぬ若者の時代であり、またこの劇全体の基調に流れている新しい世代への期待と祝福が実現される時である。世代の交代という大きなサイクルが完結し、古い世代が減じ、新しい世代がその中から誕生する。また前の世代と同じ誤まちをくり返す世代かも知れないが、一切の人間に関する幻想をふり落して、到達した境地は、このような人間生存のぎりぎりの極限状態にならざるを得ない。

人間は歴史からのがれることはできない。我々はすべて「歴史の狂気」の影響をまぬがれることはできない。しかしそこから学ぶことは

できる。ちょうどキャリバンが「あらし」を通り抜けて、最初からやり直すことを学んだように。結果がどうあろうと、可能性にすべてをかけ得る、という事である。

第五幕第一場におけるゴンザロの述べるように、「我々は、狂気になって、初めて、我々自身を発見した」のである。言いかえるならば「あらし」という狂気のもとで、各自がそれぞれに本性をくまなく表わしたのである。シェイクスピアは、王と奴隷を区別しないように、キャリバンとファードinandも、その実体を直視すれば、本質的に何ら差がない事も示す。今日Aであったならば、明日もAであると思うのは、一つの幻想にしか過ぎぬかも知れぬ。生々流転してやまぬこの世界の姿を運動においてとらえるならば、まさに一瞬一瞬に生まれ出る奇蹟が、ただちに単なる一つの事実に変換されて行く過程にほかならない。

ただ人間が、そのような状態に長くは耐え得ない、というに過ぎない。事実や理由などをいらだたく追求しないで、不確定、神秘、疑惑の状態にとどまっている能力 (Negative Capability) に欠け勝ちであるというに過ぎない。あえて証拠を求めず、また「これが証拠だ」という言葉と事実を盲信しないこと。シェイクスピアの作品の総決算が、この「あらし」の中に盛りこまれている。

「これは、幻想と現実を自在に織り混ぜることによって、それが何れも文学が我々に与える幻覚であるという意味では、本質的に同じであることを知ったシェイクスピア自身の、拘束されない境地を反映したものと考えて差し支えない。……」という、「あらし」についての吉田健一氏の評言も同じ事を述べているのである。

この世界を外現と見なし、この世界の非情さにめげず、自分の意志によって与えられた機会をつかみとること、これがシェイクスピアの理解した人間が生きているということであり、我々の現に生きてゆかねば

ならぬ道でもある。

(一九七一年三月三十一日出稿)

〔註〕

- 一、英文の引用文はすべて、New Penguin Shakespeare の Anne Righter 編『The Tempest』(一九六八年)から取った。
- 二、各英文の引用文の下につけた日本語は、福田恆存氏のものをお借りした。
- 三、吉田健一著「シェイクスピア」は、新潮文庫、昭和三十八年発行のものである。